

## 無知の習慣と認識的悪徳 ——フェミニスト認識論と人種の現象学の観点から——

大橋 一平

### 0. 序

もしも世界に気づかずにいることが学習の賜物であるなら、気づくことは政治的な労働の一形式になる。何に気づかないでいるようにわたしたちは学習するのだろうか？よそ者と見なされた人々の苦しみが現れるとき、それは意識の隅にぼんやり浮かび上がるだけでしかなく、ある種の苦しみに気づかないようにわたしたちは学習する。実際これは、わたしたちがよそ者という形象について学習する方法のひとつだ。よそ者とは、単にわたしたちが認識しない人々ではなく、わたしたちがよそ者だと認識する人々であり、単にあなたが知らない人々でもなく、あなたが知るべきでない人々のことである。(Ahmed, 2017: 32=邦訳 60 頁)

無知に関して、そこにある種の行為者性があるという指摘は、一見すると理解し難いだろう。ある事柄に関して無知であったと語ることは、多くの場合、何らかの言い訳として表現されている。特に、差別に関する問題について「知らなかった、気づかなかった」というのは、自身がその問題に主体的に関わらないでいること、場合によっては何らかその差別的構造に関与してしまったことに対して、自分では如何ともしがたい仕方がないことであったかのように用いられる。たしかに、私たちには知り得ないような問題はあるだろう。また、まったくの無意識で気づかなかったという場合もあるだろう。しかし、無知というあり方は、行為者性を欠いているものだけではない。フェミニスト認識論における「無知の認識論」という分野は、無知が単に真なる知識を欠いているという受動的な認識のあり方を示すのではなく、ある特定の社会の規範的構造のもと、あえて特定の事柄に関して知ろうとしないこと、むしろ知ることに抵抗する積極的な認識実践であることを明らかにしてきた。

冒頭で引用した Ahmed の記述は、まさに積極的な無知 *active ignorance* (Medina, 2012) という無知のあり方をよく表している例である。ここでの無知とは、単に真なる知識が欠けているということではないし、気づいていないということでもない。意識の片隅には彼/彼女らのことが浮かんでいるが、同時にそのことに対してある種の「抵抗」を感じる。そして相手をよそ者であると認識することを学んでいくうちに、その抵抗に任せてそれ以上知らないでいる、無関心であろうとすることが許容され、習慣化されていく。このような、自覚的ではないにしろ、無意識的でもない、気づいていながら、あえて気づかずにいるような捻れ

た認識的な態度が、ここで問題にされているのである。そして同時に重要なのは、このような無知という態度が、社会的習慣のなかで実践され獲得されていくという行為者性への注目である。

本論文では、ある社会的構造のなかで習慣化され学習される無知、つまり無知の習慣に着目することによって、そこにおける行為者性に焦点をあて、責任の根拠となる主体性を明らかにし、認識的悪徳の観点からその責任を問題化することである。そのために、近年注目を集めつつある「人種の現象学」における人種差別的習慣の分析を議論の足がかりとすることで、従来議論されてきた無意識の習慣や、無知に対する責任の根拠を行為者の意図に求める説明とは異なる、前反省的に意識されている習慣的無知の次元を示す。しかし本稿で検討するのは責任帰属の必要十分な根拠に関してではなく、前反省的次元において責任が問題となる認識主体の変容に開かれたあり様を記述することである<sup>1</sup>。

第一節では、無知の認識論における無知の習慣に関する議論を整理する。当該領域において従来なされてきた争点を提示するために、Charles Mills における「白人の無知 White ignorance」概念の紹介と、その概念にまつわる近年までの議論を検討する。第二節では、人種の現象学的アプローチの観点から前節で提示した争点にアプローチすることを通じて、人種的習慣における前反省的意識の次元、そこでの行為者性、さらには習慣の主体に対する責任を論じる。第三節では、「カラーブラインドネス」の事例の分析を通して、人種の現象学による人種的習慣の分析を無知の習慣の問題に適用する。その際、無知の習慣に特有の深刻な問題があることを Medina のメタ的な無知 Meta-ignorance の概念を検討することで示す。そこから「前反省的に意識化された無知の習慣」を論じる必要性を明らかにする。最後に第四節では、無知の習慣に対する責任の根拠である知的傲慢さという「認識的悪徳 epistemic vice」を、行為者の観点から論ずる。Sartre の反ユダヤ主義の議論を参照することで無知の習慣を動機づける不安や恥の感情に着目し、そこでの動機が単なる差別的動機ではなく、既存の自己理解への愛着が揺るがされることへのためらいに抵抗する、あえて感情に「身を任せ続ける」という弱さの経験にあることを示す。

## 1. 無知の認識論と無知の習慣

「無知の認識論 Epistemology of ignorance」という用語は Mills が 1997 年の著書『人種契約』において、伝統的な社会契約論のうちで暗黙裡に前提されてきた人種差別的構造の認識論的側面に焦点を当てた際に用いた用語である。そこで明らかにされたのは無知という認識のあり方が、伝統的な認識論が問題にしてきた「真なる知識の欠如」という受動的な状

<sup>1</sup> あらゆる無知の習慣が問題であるわけではない。本論文では問題のある無知とそうでない無知の根拠に関する議論は行うことができない。あくまで社会的抑圧を維持してしまう限りで問題のある無知の習慣に焦点をあて、そこでの責任主体のあり方を論じている。

態なのではなく、社会において支配的な集団が自らの特権的地位を維持し、被支配的集団を周縁化するシステムとして積極的に生産され構造化されているということであった。

無知の認識論を認識論の重要な問題として確立したといえるのが、2006年に Nancy Tuana や Shannon Sullivan らによってフェミニスト哲学の学術雑誌である『Hypatia』で組まれた「無知のフェミニスト認識論 Feminist epistemology of ignorance」特集と、同じく Tuana と Sullivan が編者となって2007年に出版された論集『人種と無知の認識論』である。本節ではこの論集に収録された Mills による「白人の無知」論文における議論と、当該論文で提示された「白人の無知」概念をめぐる近年までの議論を整理することで、無知の習慣に関する議論の争点を提示する。

Mills によれば「白人の無知」とは白人性<sup>2</sup>に基づくレイシズムや人種的支配が重要な因果的要因として働いている、文化歴史的に構築されてきた無知の形態であり、それは個人の認知的現象を通して働いている (Mills, 2007: 20) つまり非白人の被ってきた差別的な歴史や、現在も続いている人種的抑圧の状況についての無知は、支配的な地位にある白人の認知的な関心に基づいて形成されてきた人種的偏見やそれに基づく政治社会的構造の中で生産されるものであり、またその社会で生きる個人はその無知を自身の信念形成の中で反映させていく。つまり支配的な立場にある白人は自らが歴史的に作り上げてきた人種的偏見や歪んだ人種的イメージによって、自らの世界を不正確に見ることを学び、誤った信念を持ちつづけるのである。そして同時にそのような間違った世界認識が文化によって保障され、再生産され続ける。白人である主体は、自らが発明した「妄想世界、人種的空想世界、共感的幻覚」の内では生きていく (Mills, 1997: 18) <sup>3</sup>。

また白人の無知は、個人の明らかな人種差別的動機による無知と、より非個人的な社会構造的要因によって働いている無知の両方を含む概念である (Mills, 2007: 21)。つまり、仮に当人が人種差別的な動機をもっていなかったとしても、当人が属するコミュニティや地域において共有されている差別的偏見を無自覚に内面化している場合も、この無知に当てはまる<sup>4</sup>。

---

<sup>2</sup> ここで Mills が念頭においている「白人性」とは生物学的意味で用いているのではなく、人種化された社会システムの中で社会的に白人と分類される人々を指すものとして用いている。後年の論文では Haslanger に依拠しつつ「自然種としてではなく、むしろ社会種」として捉えていると述べている (Mills, 2015: 217)。

<sup>3</sup> 例えばロドニーキング事件における証拠ビデオ (警官に残忍に殴られながら、無抵抗であり続ける男の映像) が明らかに警官側に不利なように思えるにもかかわらず、殴られている身体の側に危険や危害を加えようとしていたという意図が読み取られたという Butler (1993) の分析はこのことをよく表している。また Lorrain code (2014) はこの Butler の分析を「堆積した無知 sedimented ignorance」と呼んでいる。

<sup>4</sup> しかしこれはあくまで概念的な区別であり、実際の経験的次元では両者を分離することが困難な場合もあることを、Mills 自身認めている。

そして Mills は、白人の無知が個人的かつ社会的な認知的プロセスであることを理解するためには、個人の認知的プロセスだけを単独で分析するのではなく、知覚や概念、記憶、証言、集団的な関心といった要素がどのように結びつき、また社会化されているのか検討する必要性を主張する。「たとえば、個人の認知的行為者が知覚するとき、彼は社会化 *socialized* された目と耳でもってそれを行っている」(Mills, 2007: 23)。そして知覚は、背景的概念の枠組みを通して知覚するのであり、また知覚を通じた推論は、自覚的であれ無自覚的であれ、単に個人的ではない社会的な記憶に訴える。さらには、「あらゆるレベルにおいて、関心は認識を形成し、何をどのように見るか、私たちや社会が何を記憶することを選ぶか、誰の証言が求められ、誰の証言が求められないか、どの事実や枠組みが求められ、受け入れられるかに影響を与えうる」(Mills, 2007: 24)。

このように Mills は社会的文化的構造が個人の認知的プロセスの形成に強く関与する仕方を強調しているが、同時に白人の無知が社会全体を一様に支配していると主張しているわけではない。Mills は社会的抑圧に対する感受性を高めることでこの無知が克服可能なものであることを示唆してもいる。「白人の無知は、克服不可能ではない認知的傾向…として考えるのが最善である」(Mills, 2007: 23)。

Mills が提示したこの「白人の無知」という概念は、これまで様々な仕方で参照され、議論されてきた。以下では、無知の習慣との関係でいくつかの議論を紹介し、争点となっている問題を整理したい。

まず無知の習慣の問題にいち早く注目した Sullivan は 2006 年の著書『白人性を暴露する一人種的特権に関する無意識の習慣』の中で、「無意識の習慣 *unconscious habit*」という観点から人種的特権と結びついた無知について論じている。ここで彼女が無意識の習慣と述べているのは、人種に関する習慣の意識化されずに身体化されて働いている実践的側面を強調するためである。そして 2014 年の論文や 2015 年の著書では Mills の白人の無知の議論をより「生理学的 *physiological*」な仕方で理解しようと試みている。これまで人種の哲学は生理学と生物学の観点から人種差別的習慣の問題を考察することを避けて、意識的な信念のレベルで分析を行ってきたが、Sullivan は環境的要因を適切に考えるために生理学と生物学の視点を重視する (Sullivan, 2014: 594)。つまり Mills のように個人の認知的態度、心理的狀態から無知を捉えるのではなく、生理学と生物学的観点を導入することで無意識的な習慣とそれによる身体的構成を問題化しているのである (Sullivan, 2014: 596-7)。

Milazzo (2017) はこのような Sullivan の無知の習慣理解に対していくつかの批判を展開している。Sullivan は無知の習慣を無意識的な習慣によって構成されるものとして考えることで、認識主体にとって習慣がコントロール可能ではないものとして考えるが、そのような捉えるならば実際に無意識になされた態度だけでなく、積極的に自身の特権を維持するために行なっているような無知に関しても行為者性を問題にできなくなってしまう (Milazzo, 2017: 9)。さらに Sullivan の議論においては人々の特権的態度は無意識的に再生産され、受動的に受け継がれ、意図せず維持されるものとして分析される。そこでは実際に個人が積極

的に寄与しつつけている人種差別的抑圧に関しての責任を問題化できなくなってしまう (Milazzo, 2017: 10)。

以上のような無知の習慣をめぐる議論の争点は以下の三点に整理することができる。

1. 無知の習慣は意識的 conscious (もしくは故意 willful<sup>5</sup>) なのか無意識的 unconscious, implicit なのか<sup>6</sup>
2. 無知の習慣は変えることができるのか、主体のコントロールの外なのか (行為者性の有無)
3. 無知の習慣に責任主体はあるのか、どのように責任を問うのか

これらの争点は「白人の無知」という概念の多義性によるものだが、無知というあり方だけでなく、習慣というあり方それ自体に付きまとう論点でもある。しかしこれらの先行的な議論では冒頭で提示したような無自覚的に無知を習慣化することで、構造的な社会的偏見を維持、強化してしまう状態に関して、そこにおける行為者性や責任の主体性を問題化することができない。それゆえ本稿では、前反省的な意識の次元において人種化された習慣の行為者性や責任を分析してきた人種の現象学的アプローチを検討することによって、上記の問題に答えていきたい。

## 2. 人種差別的習慣の行為者性—人種の現象学の視点から

現象学的方法論はフェミニスト認識論や人種の認識論において「状況づけられた知ること situated knowing」という知識を認識主体が位置付けられている状況のなかで理解する議論の文脈において、個人の「身体化された知識」や自身の認識的態度に対する「一人称的知識」を提供するものとして参照されてきた (Alcoff, 2006: 2021; Medina, 2012; Anderson, 2020)。そして人種の現象学は Merleau-Ponty の身体論や知覚の分析、Frantz Fanon の『黒い皮膚・白い仮面』における人種化されて生きられた経験、そこでの「歴史的—一人称的図式」等の分析から影響を受けつつ、人種的経験の一人称的記述を行うとともに、意識や知覚、感情において経験される現象の社会的、政治的、歴史的、文化的な構築の次元をも批判的に考察する学問領域として近年注目を浴びつつある<sup>7</sup>。なかでも Linda Martín Alcoff や Alia Al-Saji, Helen Ngo といった論者は現象学的方法論において人種差別的な、もしくは人種化さ

---

<sup>5</sup> しばしば無知の認識論者は個人があえて無知であろうとする態度を単なる信念の欠如としてのあり方と区別するために「Willful ignorance」という用語を用いる (Mills, 1997; Tuana, 2006; Alcoff, 2007; Medina, 2012)。

<sup>6</sup> 個人の認知的現象と構造的な人種差別との関係に関して「無意識のバイアス」による説明も多くなされてきた。「白人の無知」と「無意識のバイアス」との関係については (Beckles-Raymond, 2020) が詳しい。

<sup>7</sup> 日本語での紹介に関しては小手川 (2020) , 小手川・池田 (2021) を参照。

れた習慣の分析を行なっている。本節ではこれら人種の現象学の議論を参照しつつ上記の問題に応答する足がかりとするために人種化された経験における「習慣の前反省的意識の次元」、「習慣の行為者性」、「習慣の主体に対する責任」についてそれぞれ論じていく。

#### 「習慣の前反省的意識の次元」

現象学的分析は、私たちが暗黙の内に前提とし、自然であるとさえ思っている人種的経験に関する構造を明らかにする。例えば、夜道で前方から黒人男性が歩いてきた際に「襲われるのではないかと感じ、目線をそらし、あえて遠回りをしてしまったのだとしよう。そこでの知覚や振る舞いは、一見すれば「自然な反応」と感じられるかもしれない。しかしその実、こうした知覚や振る舞いは、「自然な反応」などではない。そこには、「堆積した文脈的な知識」が表現されているためだ (Alcoff, 2006)。ここで注意すべきは、文脈的な知識と知覚や振る舞いとの関係を、無意識のバイアスや偏見によって説明することは十分ではない、ということだ。この説明の仕方では、(部分的には無意識のバイアスが存在するにしても)、個々人が、そのバイアスや偏見を、具体的にどのような仕方で身体化しているのかを説明できない。つまり個々人が、個々の状況をどのように理解し、その状況でいかに行為すべきと考えているのかを説明できない (Ngo, 2017; 池田・小手 2021)。しかし、上述のような習慣は、自覚的に明確な動機をもって行なわれている訳でもないだろう。かといって自身の知覚や感情による他者に対する評価に対して無意識的なわけではない。自身が有している差別的信念を反省的に意識していたとしても、無自覚的な仕方で差別的な身体的振る舞いが習慣化されてしまっている。そこでの状態は、反省的でも無意識的でもない「前反省的 pre-reflective」に意識されている状態である。

#### 「習慣の行為者性」

前方から黒人男性が歩いてきた際に目を逸らし、身体を過剰に避けてしまう習慣化された振る舞いは、明確な差別的意図や動機に基づいて為されるヘイトスピーチやジェスチャーとは区別されるべきものだろう。しかしそれは、前者には人種差別的な動機や思考がなく、後者にはそれがあるということではない。前者においては、それが前反省的に身体的思考のレベルにおいて「表現」されている (Ngo, 2017)。つまり、「黒人男性への恐れ」やその他の関連するステレオタイプが(明確に信念として意識化された仕方ではないにしろ)、身体的振る舞いにおいて、相手や周囲に対して表現されているのである。ここで働いている行為者性は「前反省的な行為者感覚 pre-reflective sense of agency」(Gallagher, 2021)と言えよう。つまり、自身の行為について反省的に判断や評価を行なっている訳ではないが、前反省的に自身が何を行なっているのか、どのような行為に関与しているのか気付いている状態である。事後的に自身の行為の意図や動機を振り返ることが可能であるのは、そのような反省以前に行為の細部については明確に意識していないにしろ、行為しているのがまさに私であるという行為者性の感覚を有しているからである。それゆえ反省的な行為についての意識

は前反省的な行為者感覚に基づいている。

しかしこのような前反省的な身体的習慣のレベルにおいて行為者性があると主張するとき、これは自動的になされたもので、当人が制御出来ないものではないかとの問いが生じるだろう。Ngoは身体的習慣を二つの次元に区別している。単なる過去の行為の反復であるような「習慣的なもの the habitual」の次元と、新たに習慣を獲得していく「習慣化されたもの the habituated」次元である (Ngo, 2017: 6)。多くの習慣は、これまでの行為をただ繰り返しているだけのように感じられる。毎朝歯を磨くことや靴を履くことは自身にとって慣れ親しんだものであり、容易に行われ、わざわざ意識することもない。しかし同時に、習慣は新たな可能性にも開かれており、未知なるもの、面倒なものを自身の身体に適応していく構えをとることもである。さらに Ngo は、習慣のより積極的な側面として、習慣を「保持する holding」という点に注目している (Ngo, 2017: 39)。私たちは習慣を獲得し、それをただ自動的に繰り返しているのではなく、志向的に維持し続けている。それは例えばテレビなどのニュースで黒人男性の暴力事件が報道されるたびに、自覚的にであれ無自覚的にであれ、「黒人男性には気をつけよう」と注意し、実際に黒人男性が前方から来た際の過剰な振る舞いを方向づけ、準備する。

#### 「習慣の主体に対する責任」

上で確認したように、身体化された習慣には、その習慣を保持し続けるという積極的な行為者性を認めることができる。このことによって、人種差別的習慣を維持し続けてしまうことの責任が問題となる。人種の現象学的分析は、あたかも生理的であり自然化され自動的にあるように思われる身体化された習慣が、別様に変化する可能性に開かれて在ること、そしてそこには行為者性が伴っていることを明らかにする。「習慣における積極的な契機は私たちに、自分自身の人種差別的習慣に関して責任の概念をより明確に分節化することを可能にする」(Ngo, 2017: 41)。たとえば Al-Saji は、私たちの身体的習慣の情動的側面における「ためらい hesitation」という態度に注目している (Al-Saji, 2014)。先に挙げた黒人男性に対する過剰な態度は、一見すれば自動的な反応のようにも思えるが、そこには自身の態度や偏見に対しての戸惑いや罪悪感や葛藤といった身体的反応を「遅らせる」契機を見出すことができる (Al-Saji, 2014: 147)。そしてそのようなためらいは、自身の人種差別的習慣を自然なものとして捉える見方を括弧に入れ、別様のものに変えるための契機でもある。

しかし人種差別に対する責任を「個人の悪しき習慣」に帰することは、支配的な人種差別的社会規範の影響を過小評価しているのではないか、という懸念があるかもしれない。とはいえ身体化された習慣は、支配的な社会規範から自動的に導かれるものではなく、個々人がそれを環境との調整のなかで「いかに」自身の内で保持するのか、抵抗するのかが問題となる。

### 3. 前反省的に意識化された無知の習慣—カラーブラインドネスの事例を通して

José Medina は、Mills による「白人の無知」の議論を含めた、フェミニスト認識論や社会認識論で論じられてきた無知に関する議論を「積極的な無知」として次のように提示している。

この積極的な無知は単なる信念の欠如や誤った信念があるということとは区別されなければならない。それは、認知的相互作用の能動的なパターンや、知覚し、聞き、話し、考え、行動することの習慣的なあり方に根ざした、消し去るのが難しい抵抗的な無知なのである。(Medina, 2013: 39)。

Medina (2013) はカラーブラインドネスの事例を、白人の無知の一形態として捉え分析しているため、その議論を足がかりとする。例えば健康な白人男性が、同僚の黒人女性に「私はあなたの肌の色なんて気にしないよ、私はあなた自身を見てるんだ」と話す場面を考えてみよう。このような発言は、しばしば話し手の誠実さ、人種的偏見のなさを相手に示すために発せられる。一見これは不当な人種的ステレオタイプによって歪められた関係性へのコミットを拒否する、倫理的に優れた振る舞いのように思われる。しかし実際にそこで表明されているのは、話し手と聞き手との間、両者を囲む社会的状況において働いている人種的な影響に対する理解を回避する振る舞いである。例えば、あえて「肌の色を気にしない」という発言をすることは、既にそこに人種化された知覚が働いていることや、そのように相手を見ていることの表明である。また、健康な白人男性という、会社内で優位な立場にある話し手の「肌の色を気にしない」という発言は、社会的に周縁化された相手の立場についての無知だけでなく、話し手自身の特権的立場についての無自覚さをも相手に晒している。

重要であるのは、相手の社会的立場だけでなく、自身の特権的立場について無知であり続けているその習慣化されたあり方だ。つまり「カラーブラインドネスは社会的立場性について積極的に無知であることを必要とする」(Medina, 2013: 43)。それは、「自身と関わる他者たちとの関係にある自分自身について知ろうとしないということ、つまり、世界における自身の人種化された視点がそれ自身を、自身とは異なって位置づけられた他者たちや彼女ら/彼女らの人種化された視点に対してどのように位置づけるのかについて知ろうとしない」ということである (Medina, 2013: 43)。

さらに、カラーブラインドネスにおける無知の習慣には、特有の深刻な問題がある。なぜなら無知の習慣は、自身の問題ある習慣を変えるためのオルタナティブな可能性について知ることを阻害するだけでなく、それに対して抵抗するような認知的態度をも生み出すからである。Medina はこのような無知の次元を「メタ的な無知」と呼ぶ。メタ的な無知とは「特権や抑圧や社会的不正義に根差した非常に問題を含むメタ的な態度」(Medina, 2013: 44)であり、それは個々人の人種に関する社会的知覚を、方向づけ規制するような無知の次元で

ある。この社会構造に根差した無知の在り方は個々人の人種に関する問題に対しての「無感覚」を生み出す。この無感覚とは認知的でありかつ情動的な次元での無関心である。Medinaはさらに、このような人種的差異に関する認知的かつ情動的な無感覚は、単に個々の問題に関しての盲目さを生み出すだけでなく、人々の内に、自身の無感覚さがどのような輪郭と限界を持つのかを認識できなくさせる「メタ的な無感覚 meta-insensitivity」を植え付けると論じる。

具体的に説明しよう。まずカラーブラインドネスについての社会通念として「人種差別はもはや存在しないし、人種の差異というのは何の意味もない」という無知を生み出す支配的な社会的規範がある。そしてこの無知を生み出す規範が個人において内面化され、自身の人種的特権性や、他者の人種的に周縁化された状況についてなどの人種的差異に関する敏感さを限界づけるメタ的な無感覚を生じさせる。この無感覚は単に信念レベルの問題ではなく、人種的差異を感じることに *feeling*、他者に対して共感 *empathy* する能力をも制限する (Medina, 2013: 49)。そしてこのメタ的な無感覚によって無知が個人の内面で習慣化されることで個々の状況における無知をうみだす。Medinaはこの意味でのメタ的な無知を、一階の無知に対する二階の無知と定義する。そして Medina がこのメタ的な無知の特徴として強調するのが「自身の限界や盲点を認めることや気付くことが出来なくなる」という点である (Medina, 2013: 46)。つまり具体的場面において自身の無知を指摘されても、当人はメタ的な無感覚に陥っているために、自身が何についてどの程度無知であるのかに気づくことができない。それゆえこのような無知が生み出す抑圧と無知の習慣における責任を個人に問うことの困難さが問題となる。「そのメタレベルで働いている抵抗的な無知の形態はカラーブラインドな主体を、人種的不正義に対する責任をとることを不可能にする。……その結果、人種的な問題に対する麻痺や無感覚が生じ、不正に対応したり、倫理的・政治的に改善したりする行為者の能力が制限される」 (Medina, 2013: 47)。Medinaは Alcoffを参照しつつこのような無知の習慣を変えることの困難さがある種の「悲観主義」とする。

以上の Medinaによる分析から確認できるのは、無知という習慣に行為者性や責任の主体を認めることの難しさである。Medinaはこの悲観主義を克服するために、自身を批判的な状況から敢えて遠ざけることで「摩擦」を避けるという態度と、その結果として獲得される「無感覚さ」に対して、それが「傲慢さ *arrogance*」という悪徳であると指摘する。そして自身の無知や、人種化された知覚や構造に対して批判的な反省を引き起こすような多様な視点に自らを晒すことへの責任を問題化する。しかしそれは、Medina自身のあまりに厳しいメタ的な無知からの演繹的説明からすれば困難であると言わざるを得ない。Medinaのトップダウンによる説明からはほとんど無知の習慣の行為者性は問題とならないからである。それゆえ本稿では、Medinaのような演繹的な説明ではなく、上述した現象学的アプローチによって無知の習慣とそこに働く悪徳を、行為者の観点から分析する。

Ngoによる身体的習慣の分析においてみたように、習慣は社会的な規範をそのまま反復することによって自動的に形成されるものではない。それは「いかに」その規範を内面化する

るのか、もしくは「いかに」その規範に抵抗するのかという行為者の積極的な関与によって維持されている。私たちは人種差別の問題について詳しく知らなかったとしても、目の前の相手を人種的「他者」として知覚することを学び、その他の仕方でも相手を知ろうとしてこなかったのである。また Al-saji は、「ためらい」の経験が、無知や無知を改善しようとしてこなかった傲慢さやそこでの「傲慢なヴィジョン」<sup>8</sup>に批判的な契機となるとして、次のように述べている。

ためらいは、ヴィジョンが、そこにおいて当たり前だと思っていてまだ見ることでできない習慣や社会化の構造を問い直し、自己批判できるような間隔を与えてくれる。ためらいは、客体化する視線によって認識されることのない情動的な場に対する開放性と応答性の努力へと拡大されるのである。この意味で、ためらいは無知と傲慢さの救済策になるのだ。(Al-Saji, 2014: 153)

逆にいえば、無知の習慣やそこにおける傲慢さはこのような「ためらい」の経験に対して目を背け続けてきたことによって生み出されてきたのであると言える。そしてこれらは、メタ的な次元で自身が無知であることが認識されていなかったとしても、前反省的な次元においては意識化されている。むしろ、このような前反省的な次元においてあえて無知であろうとする態度が行為者自身に意識されていなければ、自分はメタ的な無知（自分が無知であることに無知であった）に陥っていたのだと反省的にメタ的無知を語ることや、そこに何らかの瑕疵を見出して責任を課すことは困難である。つまりメタ的無知の前提に、「自身の無知に気付いていながらあえて無知であろうとしてしまう」ような前反省的に意識化された無知の習慣の次元がある。そこには何かしら目の前の相手の人種的境遇に気付きつつも、同時にその問題に関する自身の無知にも気付いており、しかしそれにあえて向き合おうとせず、相手を「他者」として客体化することでそれ以外の仕方で見える可能性を排除する知覚に安逸とし、互いの関係に波風立てないようにしよう、といった志向的態度がある。では無知の習慣はいかにして自身の無知に対してあえて無知であろうとする認識的態度、つまりところ傲慢さといえるだろうか。無知の習慣の認識的責任を問題化するためにはそのような認識的な悪徳としての傲慢さを行為者の視点から明らかにしていく必要がある。

<sup>8</sup> Al-saji は注において以下のように述べている。

「私は Marilyn Frye の用語 "arrogant vision" from *The Politics of Reality: Essays in Feminist Theory* (Freedom, Calif.: The Crossing Press, 1983: 52-83) について書いている。言い換えれば、ためらいは「私は他には見ることができない」という人種化するそして性差別的なヴィジョンの排他的な論理に対して批判的な修正をする。」(2014: 169)

#### 4. 無知の習慣と認知的悪徳

無知を認知的悪徳の観点から問題化した研究として Medina (2012, 2013)、Tanesini (2020, 2021) がある。Medina の議論を発展させた Tanesini によれば、認知的悪徳とは、認知的に重要である事柄や目的から目を背けるような、習慣化された感情的反応を伴う無感覚な感受性 *insensitive sensibility* である。なぜ無感覚な感受性が認知的悪徳と言われるのか。認知的(悪)徳にとって感情が重要であるのは、それが、認知的探求を導く問いに対する正確な答えを形成する際に必要な情報や証拠を見つけようと、重要な環境的特徴に注意を向けるからだ。無感覚な感受性はそのプロセスを妨げ、無知を動機づける (Tanesini, 2020: 102)。本節ではこのような認知的悪徳の感受性モデルを採用しつつ、自身の無知に対してあえて無知であろうとする傲慢さを、現象学的分析を通して行為者の感情に焦点を当てて説明する。

Sartre は『ユダヤ人問題についての考察』において、反ユダヤ主義者たちの、眼前にある証拠を無視し自分の都合のいいように理屈をでっち上げる認知的な態度を分析するために、真理に対して開いた心を持った人々と閉鎖的な心をもった反ユダヤ主義者とを対比している。開いた心を持った人々は、真実の「苦しみ」に耐えながら、批判に対して自らを晒しつつ探求を行う。対して反ユダヤ主義者に特徴的なのは、自身が慣れ親しんだ様式に固執して変化を恐れる態度であり、「真理に対する恐れ」であり、自分自身が真理に直面することで、自らのこれまでの生活様式が宙づりになってしまうことへの恐れである。Sartre は、このような変化を恐れる態度を、「不浸透性への郷愁」と呼ぶ (Sartre, 1954: 20)。

重要なのは、Sartre が、反ユダヤ主義者の閉鎖的な認知的態度にみられるような、変化を恐れ、自身の安楽や親しみある認識に固執し続けるあり方を、ある種の情念 *passion* における強い動機によって説明する点である。Sartre によれば、反ユダヤ主義者は憎しみという「自己欺瞞 *mauvaise foi*」<sup>9</sup>に身を任せることで眼前にある証拠から目を逸らし、自身にとって安全なあり方で居続けることができる (Sartre, 1954: 22)。

一見すると、このような認知的な態度は、ユダヤ人に対する憎しみという差別的感情に動機付けられているように思える。しかし問題なのは、彼らが何らかの点でユダヤ人を憎んで差別的思考をしているのではなく、むしろ憎しみに身を任せることで自身にとって都合の良い証拠をでっち上げ、反ユダヤ主義的な認識を形成していることである。その憎しみの背後にあるのは、単なる差別的動機ではなく、真理に直面することで自らの慣れ親しんだ安全性が揺らぐことへの「不安」<sup>10</sup>である。「彼が理性以上に避けるのは、自分自身についての内

---

<sup>9</sup> この自己欺瞞概念を現代のレイシズムの文脈で再解釈した *Black Existentialism* の古典として Lewis Gordon の“*Bad Faith and Antiracism*” (1995) がある。

<sup>10</sup> Sartre 自身は「不安」という用語を用いていないが、「自身の実存が常に宙吊りにされている」状態に対する恐れとして論じており、特定の世界内の対象に対する恐れと区別するために本論文は「不安」とし

的自覚」だ (Sartre, 1954: 24)。この不安ゆえに自分自身について批判的まなざしを向けること、自身が自由であること、責任があることの自覚をあえて避け、憎しみに身をゆだねるのである。ここに「凡庸な人々の情熱的な傲慢さ」がある (Sartre, 1954: 26)。

また、この傲慢さの裏側には「恥」があるのではないだろうか。Sartre は Fanon 『地に呪われた者』の序文において、リベラルな読者たちに向けて、彼らが Fanon の著作を読むことで、彼ら自身が植民地主義に貢献してしまっていることを自覚させられる際に直面するであろう「恥」に言及している。

かくも自由主義的で人間的な君たち、文化へ愛を気取りにまで押し進めている君たちは、ご自分が植民地を持っており、そこでは君たちの名で行なわれていることを忘れた振りをしている。ところが Fanon はその同志たちに一なかんずく少々西欧化されすぎている連中に一《本国人》と植民地にいるその手先の連帯を発いてみせる。勇気を出して Fanon の著書を読みたまえ。なぜならこの本は君たちを恥じ入らせるだろう。(Preface by Sartre to Fanon, 2004: 50) (引用者強調)

ここで Sartre が述べる恥は、社会的マジョリティであり、比較的優位な地位にある読者が、自身のリベラルな態度における矛盾や、社会的に特権的立場にあることへの自覚を否認する際に働いている。自身のリベラルな態度のうちで安らぎ、自らの特権的立場性や植民地支配の問題に関してあえて無知であり続けていたこと、そしてそのことに気付きつつ「忘れた振り」をしていたことが、恥の感情によって明らかにされる。同時にこの恥は、無知の習慣が自身の恥意識によって動機付けられ維持されていたことも問題化する。つまり恥は、道徳的に優れているという、しばしば社会的特権と結びついている肯定的な自己イメージが揺らぐことを意識させ、そのことから目を背けさせるのである。このようにして不安や恥の感情に動機づけられた傲慢さが、人種的問題への無知や自身の特権的立場への無知、またそれらを認めるのを避けようとする認知的態度を習慣化する。単に感情によって反応しているのではなく、ためらうことに抵抗するような、あえて感情に「身を任せ続ける」という次元が存在するのだ。ここに、無知の習慣において働く意識化された自己欺瞞の態度を認めることが出来る。

以上、無知の習慣における傲慢さが、単に差別的動機によってだけでなく、その背後にある慣れ親しんだ現在の生活、社会的立場への安寧さが揺るがされることへの不安や恥といった感情に動機付けられていることを論じてきた。そこで強調されるのは、知的傲慢さの裏に存在する「既存の自己理解に対する愛着」を守ろうとするある種の弱さである。重要なのは、不安や恥といった感情においては、自身の社会的アイデンティティについての意識や、自身が間違っているかもしれないという誤謬への懸念が意識されているという点で、前反

---

て解釈した。

省的な再帰性を有しているということである。不安や恥といった契機は、自己を自身の無知の自覚から逃れることを動機づけると同時に、批判的に自身の無知へと向き合う試金石でもある。にもかかわらず、「そういう生き方を選んだ」(Sartre 1954, 24) のである。それゆえにこれらの感情に対する態度は、自分自身に現在の生き方を許し続けるのか、それとも変化することを許すのかという、認識における倫理の問題となるのであり、責任が問題化される起点となるのである。無知の習慣の傲慢さは、社会的な不正を維持する。ゆえに、その責任が問われねばならない。その責任を具体化するにあたっては、上述した弱さの感覚に目を向けねばならない。このことは、構造的な不正の問題を、制度か個人かという二者択一の問題にするのではない。むしろ、不公正な社会的制度のなかでの個人に対して、否応なく認識的かつ倫理的な責任を問題にするのである。

## 文献

- Ahmed, Sara. 2017. *Living a Feminist Life*. Duke University Press (サラ・アーメッド『フェミニスト・キルジョイ』、飯田麻結訳、人文書院、2022) .
- Al-Saji, Alia. 2014. "A Phenomenology of Hesitation: Interrupting Racializing Habits of Seeing." In *Living Alterities: Phenomenology, Embodiment, and Race*, edited by Emily Lee, 133-72. State University of New York Press.
- Alcoff, Linda Martín. 2006. *Visible Identities: Race, Gender, and the Self*. Oxford University Press.
- . 2007. "Epistemologies of Ignorance: Three Types." In *Race and Epistemologies of Ignorance*, edited by Shannon Sullivan Nancy Tuana.
- . 2021. "Critical Philosophy of Race." In *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*, edited by Edward N. Zalta, Fall 2021. Metaphysics Research Lab, Stanford University. <https://plato.stanford.edu/archives/fall2021/entries/critical-phil-race/>.
- Anderson, Elizabeth. 2020. "Feminist Epistemology and Philosophy of Science." In *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*, edited by Edward N. Zalta, Spring 2020. Metaphysics Research Lab, Stanford University. <https://plato.stanford.edu/archives/spr2020/entries/feminism-epistemology/>.
- Beckles-Raymond, Gabriella. 2020. "Implicit Bias, (global) White Ignorance, and Bad Faith: The Problem of Whiteness and Anti-black Racism." *Journal of Applied Philosophy* 37 (2) : 169-89.
- Butler, Judith. 1993. "Endangered/Endangering: Schematic Racism and White Paranoia." In Gooding-Williams, R. (Ed.) . *Reading Rodney King/Reading Urban Uprising* . Routledge. (ジュディス・バトラー「危険にさらされている/危険にさらす 図式的人種差別と白人のパラノイア」、池田成一訳、『現代思想』1997年10月号、123-131) Code, Lorraine. 2014. "Culpable Ignorance?" *Hypatia* 29 (3) : 670-76.
- Fanon, Frantz. 1961 [2004], *Les Damnés de la Terre*, Maspero; translated as *The Wretched of the Earth*, Richard Philcox (trans.) .Grove Press (フランツ・ファノン『地に呪われたる者』、鈴木道彦、浦野衣子訳、みすず書房、1969年) .
- Frye, Marilyn. 1983. *The Politics of Reality: Essays in Feminist Theory*. Crossing Press.

- Gallagher, Shaun. 2021. “The Phenomenology of Agency and the Cognitive Sciences.” In *The Routledge Handbook of Phenomenology of Agency*, 1st Edition, 336-50. Routledge.
- Gordon, Lewis R. 1995. *Bad Faith and Antiracist Racism*. Humanity Books.
- Maiese, Michelle. 2022. “Mindshaping, Racist Habits, and White Ignorance.” In *Embodied, Extended, Ignorant Minds: New Studies on the Nature of Not-Knowing*, edited by Selene Arfini and Lorenzo Magnani, 77-98. Cham: Springer International Publishing.
- Medina, José. 2012. *The Epistemology of Resistance: Gender and Racial Oppression, Epistemic Injustice, and Resistant Imaginations*. Oxford University Press.
- . 2013. “Color Blindness, Meta-Ignorance, and the Racial Imagination.” *Critical Philosophy of Race* 1 (1) : 38-67.
- Milazzo, Marzia. 2017. “On White Ignorance, White Shame, and Other Pitfalls in Critical Philosophy of Race.” *Journal of Applied Philosophy* 34 (4) : 557-72.
- Mills, Charles W. 1997. *The Racial Contract*. Cornell University Press. (チャールズ・ミルズ『人種契約』、杉村昌昭、松田正貴訳、法政大学出版、2022) .
- . 2007. “White Ignorance.” *Race and Epistemologies of Ignorance*.
- . 2015. “Global White Ignorance.” *Routledge International Handbook of Ignorance Studies*. 408: 217-27.
- Ngo, Helen. 2017. *The Habits of Racism: A Phenomenology of Racism and Racialized Embodiment*. Lexington Books.
- Sartre, Jean-Paul, 1954 [1995], *Réflexions sur la Question Juive*, Editions Gallimard; translated as *Anti-Semite and Jew*, G. Becker (trans.) , N.Y.: Schocken. (ジャン・ポール・サルトル『ユダヤ人』、安堂真也訳、岩波書店、1956) .
- Sullivan, Shannon. 2006. *Revealing Whiteness: The Unconscious Habits of Racial Privilege*. Indiana University Press.
- . 2014. “The Hearts and Guts of White People.” *The Journal of Religious Ethics* 42 (4) : 591-611.
- . 2015. *The Physiology of Sexist and Racist Oppression*. Oxford University Press USA.
- Sullivan, Shannon, and Nancy Tuana. 2007. *Race and Epistemologies of Ignorance*. SUNY Press.
- Tanesini, Alessandra. 2020. “Ignorance, Arrogance, and Privilege: Vice Epistemology and the Epistemology of Ignorance.” In *Vice Epistemology*, 53-68. Routledge.
- . 2021. *The Mismeasure of the Self: A Study in Vice Epistemology*. Oxford University Press.
- 池田番・小手川正二郎、2021 「『人種化する知覚』の何が問題なのか?: 知覚予期モデルによる現象学的分析。」思想, no. 1169: 68-87.
- 小手川正二郎、2020、「人種の現象学——人種化する経験と人種化される経験から人種差別を考える」國學院雑誌.

(おおはしいつぺい・上智大学文学研究科博士前期課程)